

〈研究余滴〉夏目漱石作品中における「まだ～ない」について

赤峯, 裕子
純真女子短大非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/10414>

出版情報 : 文献探究. 21, pp.23-25, 1988-03-25. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

⑨ 「かついで喜ぶ嘘譚」、「かつぎ茶番の『八笑人』」（『滑稽本概説』所収、前掲書）

⑩ 金びら老婆の息子。

⑪ 角書は「とうじみやげ」と読む。

⑫ 二編序で春水は鯉丈のことを「予が雅兄瀧亭の叟」と呼んでいるからである。

⑬ 昭和三十九年、白日社刊。

⑭ 神保五弥氏「再説『明鳥後正夢』初編などの作者」、『暉峻康隆編』

『近世文芸論叢』（昭和五十三年、中央公論社）二百六十三〜二百七十頁。

⑮ 注④参照。

⑯ 天保三、四年に『大山西中膝栗毛』という題で改題再版されているが、同一本である。

—— 鎮西女子高等学校教諭 ——

「研究余滴」

夏目漱石作品中における「まだくはない」について

赤峯裕子

『三四郎』に次のような一節が出てくる。

（前略）美禰子が

「丹青会の展覧会を御覧になって」と聞いた。

「まだ覧ません」

「まだ覧ません」という答えは「展覧会を覧たか」という問いに対するもので、まだ覧たことがない、「覧る」という経験をしていない、ということを表している。現在では、「覧ていません」というのが普通なのではないかと思う。この場合、「覧ていない」とは、いままさに「覧る」という動きが進行中であることを表す「覧ている」の打消ではなくて、「覧る」という動きが以前に行なわれた結果生じた事象が現在も継続していることを表す「覧ている」の打消である。つまり、ここでは「覧る」という経験がないことを表している。「まだ覧ない」が「（まだ）覧ていない」と同じ意味を表しているとすれば、「まだ」の果たす役割はいまよりも大きかったかもしれない。何故ならば、「覧ない」というのは「覧る」の打消で、現在より未来または意志の打消であると考えられるからである。「まだ」によって、過去にも「覧る」ということが実現していないことを明確に示し、故に、覧たことがない、という意味を表現しているのではないかと思う。同様の例として、いくつか掲げてみよう。

その三円は五年経った今日までまだ返さない。

おれは教頭に向って、まだ誰にも話さないが、これから

山嵐と談判する積りだと云つたら、赤シャツは大に狼狽して、君そんなに無法な事をしちゃ困る。(坊っちゃん)

人に死して、まだ牛にも馬にも生れ変らない途中はこんなであらう。

余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画もかかない。

(草枕)

「此処へ越してからまだ一遍も行かないものだから、今日の日曜には来ると思つて待つてでもいたのでしょう、それで」

その後一寸礼に行こうと思つて、まだ行かない。

(それから)

「兄さんは増俸の事をまだ貴方に話さないんですか」

又三日ばかり過ぎてから、今度は叔母さんの所へ行って聞いたら、兄さんはまだ来ないそうだから、なるべく早く行く様に勤めてくれと催促して行つた。(門)

その頃は血清注射がまだ発明されない時分だったので、治療も大変に困難だつたのだらう。

枝にはまだ熱しない実が二云訳ほど結つて、その一本の股の所に、空の虫籠が懸つていた。(彼岸過迄)

門を出る時はかれこれ五時に近かつたが、兄はまだ上野から帰らなかつた。

「Kさんはまだ結婚しなかつたのですかね。」
「そうさ。善く知らないが、まさか二度目じゃなからうよ。」
(行人)

その時分はまだ道の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりずっと急でした。

Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様に残っていました。(こころ)

特に「行人」の例は、「結婚している」の「ている」が結果の残存を表すと、現在普通に考えられているだけに、「(まだ)結婚していなかった」ではなく「まだ結婚しなかつた」という表現であるのは注目に値するのではないだろうか。こうした、「まだ」とともに用いられて「くっていない」ではなく「くはない」という打消の表現をとる動詞を見ると、「(金を)返す・話す・帰る・行く・来る・読む・到着する・(電氣を)引く・回復する」などがある。例えば、「読む」は「読んでいる」という「ている」形で一般には進行を表すとされ、「この本はもう読んでいる」のような完了(結果の残存)の意味は派生的なものであると考えられている動詞である。「話す」も同様であらう。「返す・到着する・引く」は、「ている」で結果の残存を表すものであるが、いずれにしても、「まだくはない」で未完了・未経験・結果の残存の打消を表す動詞は限られている。

どうして一所に免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。

—君その所はまだ煮えてないぜ。

(坊っちゃん)

「まだ柀屋に懸合っていないから、今夜は駄目だ。」

(坊っちゃん)

「里見の御嬢さんは、まだ来ていないか」 (三四郎)

のように、「まだくっていない」で未完了・未経験などを表す例がないわけではないが、数は多くない。ここで挙げたくらいである。

以上、「まだくはない」という表現を夏目漱石の作品から例示したのであるが、これは漱石にのみ見られる表現ではない。次に、森鷗外の「青年」からの例を挙げてみる。

大学前から、道幅のまだ広げられない森川町に掛るとき、大村が突然こう云った。

「君このあいだのもまだ返さないで、甚だ濟まないが」

Dutcher という主人公が文芸家として旅に疲れた人なら、自分はまだ途に上らない人である。

己はいつかラシイ又を讀もうと思っていて、まだ少しも讀まない、ふと思つたのが縁になって、遮り留めようとしている人の傍が意地悪く念頭に浮かんで来る。

明治時代はまだ一人の Constantin Guys を生まないのである。

漱石だけでなく鷗外にもこうした表現があるということは、これは作家の個人的な文体ではなく一般的な表現だったのではないかと思う。そうすると、漱石・鷗外のこれらの作品が書かれた頃に比べ、現在は「ている」の意味用法が拡大しているのではないかと考えられよう。つまり、「(まだ)くしていない」ではなく「まだくはない」によって表現していたのは、「ている」の表す意味内容が単なる進行や結果の残存だけであつたという、その本質的な用法がこのような打消の用法にはこの頃にも残っていたのではあるまいか。「蓋が取らずにあつた」「窓がまだ閉てずにあつた」(三四郎)「まだ店が締めずにある」「まだ据わらずにいた」(青年)などの表現が今日の「くっていない」と同様の内容を表していたとすれば、やはり、この間の「ている」および「っていない」の用法の拡大がはつきりと見てとれるのである。

(注：作品からの引用はすべて『作家用語索引 夏目漱石』『同 森鷗外』による)

—純真女子短大非常勤講師—